正風躰抄

544
シ
62

九州大學圖書

九州帝國大學 昭24. 7. 13 184012 圖書

544
シ
62

正風躰抄

千載集

第一　春哥上

ちるかみちよそにそ軒端の梅はなれて袖乃

ゆかりもつけるなくらにかすれ

十首歌人々によませ侍ける

時花のうたとてよめる

花よりし野へにちられぬみちまよふさかしき家しれい

184012

く絵しら雅しきちもの見てゆく

第三 夏哥

摂政右大臣の時の歌合に

郭公の歌とてよめる

すきかねかつ夜半の寝覚にもほとゝ

きすのこゑもまくらにあまりつゝしくて

夜の雨そゝ中に

きみくましのさかで五條の烟うすしめつゝ

あはれしまゝよもはのふるしれ人へ

ゆらをとそかしさやあらあらし月をと

ころもはつる夏乃くれかな

第四 秋哥上

いろもなしはしるくあは萩生より

たのしらの秋のまたさてきこえ

おもうされのかた野への烟でかきりて

うつろなるれは 物のかそこの里

なかしかれゑらしもまつをのうへて
きよくみゆらんすめる月影

第五 秋歌下

すまうしける百首歌よみ侍
ける時虫乃うたとてよめる
ちうりける

はかなくもおもひしられしまつの声も
よるへてぬるあきかぜのくれかなる

秋歌とてよめる

藤原定家

きつれゆくものの木すゑにいろそひて
松のこゑへきゝなかなかにしる

第六 冬の歌 同

冬きては一夜ふた夜をたまさゝの
はわけの霜のところせきまで

崇徳院に百首歌めしける

まつらうらさき藤葉の
うたとてよめる
ゆきふれる草木のいろもさかりにて
こゝろねしられも木葉なりけり
國信卿人々に勧て
百首歌よませ侍りける時
あられのうたとてよめる
定家
あられふるまやの軒端にはるかきよ
やつこそしゐる竹の葉かれ
千鳥をよめる
すまのみてきつる所のうらなみにち
つまなく千鳥なかれものうらしや
月さゆる夜のうつゝあかれぬかて
旅ころもかさねさなきまくらのはを
第七　離別歌

百首哥よみ侍りける時別
のこゝろをよめる
定家
わかれても心へだつな旅ころも
いくへかさなる山路なりとも
第八 羇旅歌
旅ねするあしのまろやのとまをあらみ
きゝもなれぬ波乃おとかな
あはれなる野嶋のさきのいほりかな
露おく袖に波もかけける
第十 賀歌
我ともに君のみかきのくれ竹の
ちよいく世乃ふしをかそへん
摂政太政大臣
百首哥よませ侍ける時
祝哥五首かうちによみ

御かへし宮内卿

こゝにて渡りし人のこゝろかへるとも
ちくまの山そそらにならなむ

第十一　恋

なき家に百首歌よみ侍ける
時もしめける恋のこころを
よみ侍ける

いつとしもほかのなみのそらにさへ露や

いかならむそのたびことにおもひあへる
思ひ

甲斐のしら雲のやまかはのなかれし
あふせのしらぬまにあふみのあはれ

第十二　恋二

おもひきやちぎりしものをまつかひあらく
こひしやとおもひしまゝにのせんとこそ

第十三　恋三

法性寺殿にて五月供花
時おのこどもうたよませ侍
りけるに契後隠恋といへる
心をよませ給ける
あはれなる人の心の一夜にて
いけこなからんことをみちをくさ
わかれじへ世々のちきりはすゑのよや
ゆくらのはなきるまくら乃ふ紀

第十四　恋四

このはのこしうはのこゑ又そなれ民の
ならをわかれひまなきをもらさん

攝政右大臣の時家の歌合に
不忍恋といへる心を
あふ事のなき身はつらさしけれつるに
をとこをつつみしにはもかのわしもさ

第十五　恋五

おくやまのあらしのきかぬかげにだにかなし
身のうへのひろきなかにもみえつるゆめ
ちぎりしも秋ふかきよのたもとには涙なりけり
恋つゝもうらせぬことをみかへるとける
定家
ちのちりて秋ものかはのなかにみよ
こゝろせし人をとゞめのこゝろかな

第十六　雑歌上

山家月といふことをよみ侍ける
よみ人しらず
すこしまちてをちかたのことのつゆ山さとは
あはれくるかきとせぬ木の月の影
殷富門院大輔
百首歌よみ侍けるに
あれくたる月のかげさむく
よみ人しらず

定家

いつまでもながめてぞふる世ゐなるらん
なのめならぬ月しなかりせば
二条院御時まで
侍臣なりける事などおぼしいでて
よみ侍りける
伊のれまつらしつゝなかりけるとて
よそながら雲井の月をながめつゝ

第十七 雑部中

遁世の後花山にまかりて
かすみのうちにまつ春の花さかりを
わすれなで人のおもひこそすれ

花盛に法性寺にまかりて

ならへ金堂乃まへなる花
ちりかゝれるをみてよめる
ちかつね
ゆふぐれにさくらをしはしみてゆかむ
はなのちるをはかせにまかせて
あはれとそみし
因位法師のすゝめける
百首歌中に花のうた

よくよめる
定家
いはまもるたきのしらいとみたれつゝ
よしのゝ花はちりにけり
述懐の百首乃歌の中に
寂の平もとえける
うきゆめもなくてまつらはつれなきに

こぬよのうらもなくやかけの家

述懐乃百首歌よみ侍りける時鹿の歌とて
よめる

世中よみちこそなけれおもひ入
やまのおくにも鹿そなくなる
今上の御時五節の

ほと侍従定家あやまちあり
ちからもしまゐらせたりし
殿上の事あるましく成と
きこえのおほくきこえける
年の暮れにしもおもひまよひ
又の年のむつきの御やうに
はいまたしかりけるに院にきこえさ
せまゐらせ侍ける 左少弁

定長よしにや侍て
そまかたにつく
まかりける
あしひきの雲路
まよひしられて
うらこそたのまんへ
つきてもかつき

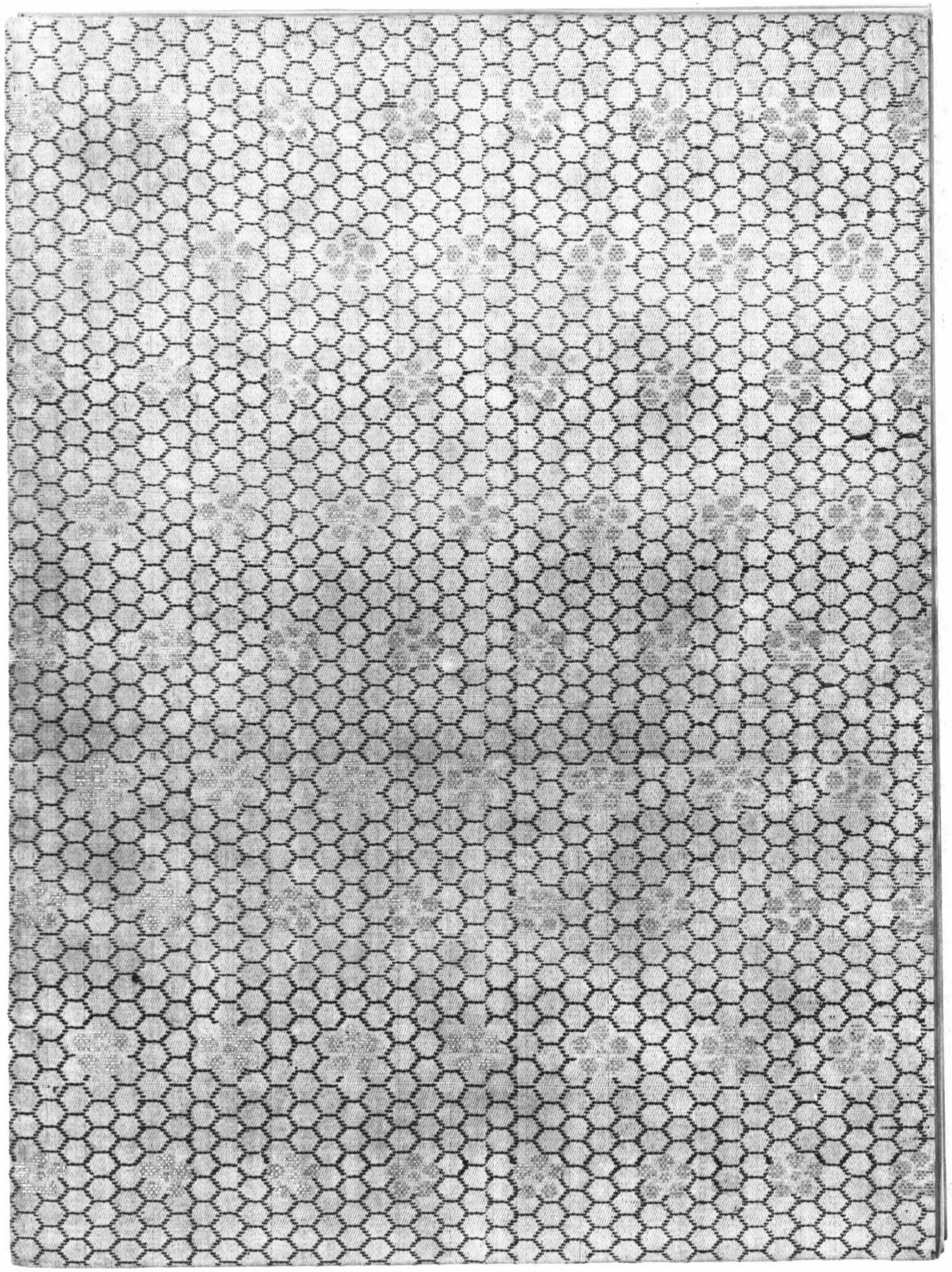
第十九 釈教哥
法師不断見涅槃経文
定頼近江にかうしき
よみける
むかしかたてしめぬ拝し
あまたなとうれしくにそなし
ひさのつまやくそまく

勅撰のうちに、はよみ人
侍らす
はしゝ丈さへぬかしく
みちの山はなしまゝの
あなかしこ

第二十神祇

いつまてかねかひそむ[illegible]
すんくし社にまつはる
あはれならすや
おなし社の後乃番に
歌よみける月のこそ
よみけれ

きゝ侍りてなかなかる
徹しいとはしたに

ながむる　秋の夜の月

九州大學圖書印